

3.4 ナガエツルノゲイトウ【特定外来生物】



★対策のポイント★

▶根ごと除去

地上部だけを除去しても、栄養繁殖により残存した植物体（根を含む）から再生

▶発見したらすぐ除去

増殖速度がとても速いため、発見次第すぐに除去

増殖すると除去に要する労力が増える

▶拡散の防止が重要

植物断片からも再生

除去の際、ちぎれた断片を拡散させないためにオイルフェンス等を設置

植物断片を広げないために駆除に用いた器具についた土は水で洗浄し植物断片を残さない

▶適正な処分が重要

外来生物法に基づいた処分が必要（1.3.2 を参照）

駆除後はアスファルト上等乾いた場所に置き完全に枯死させる

▶継続的な駆除・定期的な確認が重要

除去し損ねた植物断片から再生する恐れがあるため1回の駆除ではなく根気強く継続的に実施

駆除後も再生の有無を定期的にモニタリング

▶日本では種子をつけないので種子繁殖のおそれはない

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
生活史	越冬			開花・結実								越冬
				栄養繁殖								
駆除推奨時期					抜き取りや剥ぎ取り							

図 37 ナガエツルノゲイトウの生活史と駆除スケジュール
(生育する地域や環境により異なることがある)

3.4.1 生態・見分け方

【概要】
ナガエツルノゲイトウ (*Alternanthera philoxeroides*) は南アメリカ原産の多年生の抽水～湿生植物である¹⁾。日本では特定外来生物に指定されている²⁾。
日本では1989年に兵庫県尼崎市で採集され、本州西部以西～沖縄に広がりだした³⁾。
令和7年2月現在、西日本が中心ではあるが、関東地方、中部地方にも分布している³⁾。
4～10月に白い花をつける。日本では種子繁殖の報告はないが、栄養繁殖が旺盛で植物体断片から容易に再生する²⁾。冬季は、地上部は枯死するが、根茎部で越冬する。また、耐乾性が高く、畑地等にも侵入²⁾したり、除去後の植物体を陸揚げしても根を下ろして生残したりすることがある。

表 18 ナガエツルノゲイトウの主な生態情報

項目	情報
和名	ナガエツルノゲイトウ
学名	<i>Alternanthera philoxeroides</i>
英名	Alligatorweed
分類	維管束植物 双子葉・離弁花類 ヒユ科
基礎情報	湖沼や河川、水路、水田等に生育する多年生の抽水～湿生植物 ¹⁾
原産	南米 ¹⁾
見分け方	茎の中心は空洞（ストロー状） ²⁾ 節から1対の葉（対生） ²⁾ 葉の先はややとがる ²⁾ 白い花が咲き、花柄は1～4cmほどで葉の脇から長く伸びる ²⁾
繁殖生態	4～10月に白い花をつける ²⁾ 日本では種子繁殖の報告はないが、栄養繁殖が旺盛で植物断片から容易に再生 ²⁾
耐性	耐塩性、耐乾性が高い ^{1) 4)}

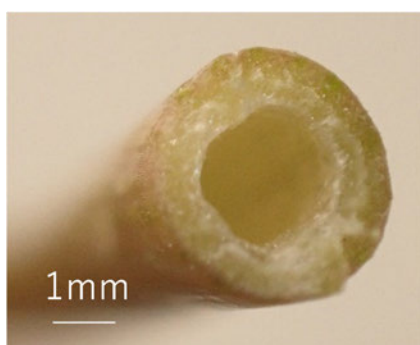
■ 見分け方

ナガエツルノゲイトウの同定については「ナガエツルノゲイトウ駆除マニュアル」²⁾、「特定外来生物同定マニュアル」⁵⁾を参考にされたい。水田や水路周りには類似した白い花をつける種が多く、間違いやすい主な植物はツルノゲイトウ、アメリカタカサブロウ、タカサブロウ、スベリヒユ、シロツメクサである。

見分け方のポイントは以下の通りである。

- ★ 茎の中心は空洞（ストロー状）（写真①）
- ★ 葉の先はややとがる（写真②）
- ★ 1～4cm ほどの長い花柄※がある（写真③）

※花柄：茎や花軸から枝分かれして花に至るまでの柄の部分



写真①



写真②



写真③

水田や水路周りに自生する類似した白い花をつける植物は以下である。



ツルノゲイトウ
（外来種）



アメリカタカサブロウ
（外来種）



シロツメクサ
（外来種）



タカサブロウ
（在来種）

■ 分布情報

国立環境研究所 侵入生物データベースの侵入情報³⁾によると、これまでに確認されているナガエツルノゲイトウの分布（令和7年2月時点）は以下のようになっている。加えて、令和5年12月に愛媛県今治市及び西条市⁶⁾、令和6年6月には福島県いわき市⁷⁾、令和7年2月に岡山県倉敷市⁸⁾での確認が報告されている。なお、侵入生物データベースには自治体へのアンケートをもとに作成された詳細マップも掲載されているため、参考にされたい。



図 38 ナガエツルノゲイトウの都道府県単位の分布地図
（必ずしも色が塗られた地域全体に分布するわけではない。
また、色が塗られていない都道府県でも分布している可能性がある。）

国土交通省等が実施する「河川水辺の国勢調査」では、河川における生物調査の中で植物調査を行っており、「河川水辺の国勢調査結果の概要〔河川版〕（生物調査編）」の「3. 植物調査」⁹⁾で一級河川における一部の種の植物の生育状況を知ることができる。以下は平成28年度～令和4年度の植物調査でナガエツルノゲイトウが確認された一級河川の調査地区である。

なお、「河川水辺の国勢調査結果の概要〔河川版〕（生物調査編）」では、年度ごとの分布情報が公表されるため、最新の情報を確認されたい。

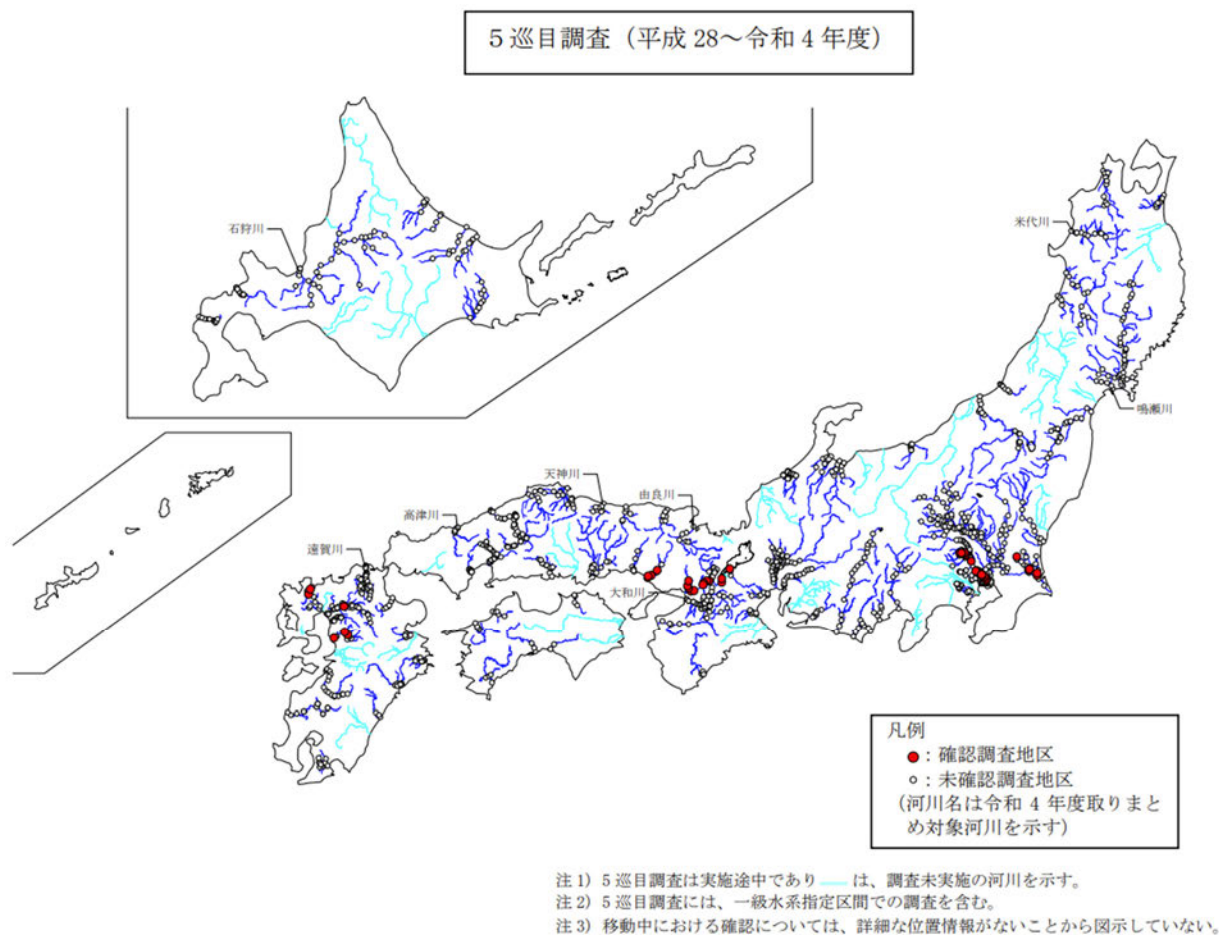


図 39 ナガエツルノゲイトウが確認された河川
 (令和4年度 河川水辺の国勢調査結果の概要〔河川版〕（生物調査編）⁹⁾より引用)
 (<http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/gaiyou.htm>)

また、河川水辺の国勢調査の結果を集約している「河川環境データベース」¹⁰⁾を令和7年2月に確認した結果、過去の調査から1回以上ナガエツルノゲイトウが確認された水系及びダムは以下の通りである。

表 19 ナガエツルノゲイトウが確認されている水系

地方	水系	地方	水系
関東地方	利根川	九州地方	緑川
	荒川		筑後川
	相模川		松浦川
近畿地方	淀川		菊池川
	加古川		遠賀川
中国地方	高津川		白川
四国地方	吉野川		

表 20 ナガエツルノゲイトウが確認されているダム

地方	水系	ダム名
近畿地方	淀川	天ヶ瀬ダム
九州地方	筑後川	寺内ダム

3.4.2 被害状況

【概要】

開水路、揚・排水機場でスクリーンの詰まり等の通水阻害を引き起こす¹¹⁾。

その他、循環かんがい施設の浄化池にナガエツルノゲイトウが侵入すると、浄化池からの送水を通じて水田内に侵入する恐れがある¹²⁾。

侵入先は開水路、揚・排水機場で通水阻害やスクリーンの詰まり等を引き起こす¹¹⁾。

台風により低地排水路等で繁茂したナガエツルノゲイトウが流下し、排水機場のスクリーン周辺に溜まり目詰まりを起こした事例¹²⁾ (写真①)、ナガエツルノゲイトウが侵入した循環かんがい施設の浄化池では水田内に侵入する恐れがあることから、送水が止められた事例¹²⁾ (写真②)、ナガエツルノゲイトウが水田に侵入した事例 (写真③)、繁茂し水路が閉塞した事例 (写真④) 等がある。



写真①



写真②



写真③



写真④

図 40 ナガエツルノゲイトウの主な被害状況

3.4.3 対策状況

【概要】

対策は重機または手作業による除去が一般的である¹¹⁾。

主に手作業による除去が実施されている¹¹⁾。

滋賀県では、手作業による除去と重機による除去が実施されている¹³⁾。重機による除去では、建設重機「スイングヤード」や水草刈取船^{p.305で解説}「ハーベスター」等を使用し、大規模に実施されている。また、そのような大規模な駆除作業では、手作業によるきめ細やかな除去作業が併用されている。この重機による除去作業後の手作業は再発生を防ぐうえで重要かつ必須な作業である。



建設重機「スイングヤード」

水草刈取り船（「ハーベスター」タイプ）

図 41 ナガエツルノゲイトウの機械駆除に用いられる重機の例

（滋賀県 HP「侵略的外来水生植物（オオバナミズキンバイ・ナガエツルノゲイトウなど）への対策」¹³⁾ より引用）
<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/shizen/14022.html>

千葉県では、重機による除去が実施されているが、環境に応じて、特徴が異なる3種類の水草刈取船を利用しており、効率的な駆除を実施している事例がある。

ハーベスター(+人力)	ハイドロモグ	コンバー(+人力)
		
		
- 刈取船内に1トン程度まで水草を貯めておくことができ、連続作業が可能 - 後方から排出するため運搬船に乗せやすい - ゴミや泥の混入が少ない - 群落や根の切り離しに人力でのサポートが必要	- 駆除スピードが3種の中で最も速い - 移動速度も速く広範囲の駆除に最適 - アームで障害物を取り除くことも可能 - 運搬船に載せなければ次の作業ができない - ゴミが多い場合、混入する - 冬季など植物体のちぎれやすい時期は切れ端が多くなる	- 水陸両用で小型のため、浅い、泥深い、狭い箇所の駆除に適している - ヨシの根に入り込んだものなど株ごと掘削できる - アームが短いため大きな船に乗せられない 1回につかめる量が少なく泥の付着が多い - 水草の積込みに人力でのサポートが必要

図 42 千葉県で利用されている水草刈取船